

研究結果報告書

活動型授業における参加者の主体性形成：来日した中国の大学の日本語専攻生の授業参加の経験に着目して

所属：華中科技大学 外国語学部 日本語科

役職：専任教師

氏名：黄 均鈞(他3名)

研究目的：中国大学日本語科の学生の主体的な授業参加が彼らの国内での教育経験（日本語授業）との関係、また、それが何によって、どのように変容されてきたかを明らかにしたい。

研究を通じての主な活動：

海外出張したときの研究活動

1. 研究仲間との打ち合わせ

2017年5月21、22日 早稲田大学構内で行う調査方針に関する話を詰めた。

2017年7月12、13日 一橋大学で研究仲間と調査資料の分析方法について話した。

2. 関連図書の購入

学会の図書販売コーナー等で、日本語教育の最新理論に関する研究書（ココ出版）、教育実践（凡人社）の本を20冊購入した。

3. 学会での口頭発表

言語文化教育研究学会の月例会に参加 2017年5月23日に言語文化教育研究学会に招待され、中国での活動型授業の問題点と可能性について報告し、フロアの方々と意見交換した。

第10回実用日本語言語学国際会議に参加 2017年7月9日、国立国語研究所で開かれた国際学会に参加、研究仲間と「大学院における留学生のアカデミック活動への参加過程の分析—中国の日本語専攻卒業生の学習経験をもとに」を口頭発表した。

研究を通して分かったこと：

1. 中国の大学日本語授業で実践研究を行い、学習者の授業参加の主体性を学習者の学習観と教師の教育観の衝突と変容から分析した。その結果、日本語学習者の日本語授業への参加の主体性は、彼らが大学の低学年に経験してきた授業の在り方と関連していることが分かった。それは日本語能力試験合格の願望、教師の「教材を教える」教育理念によって、学習者の受身的な参加姿勢を強化し、他者とのインターアクションを拒否する捉え方をしたと考えられる。その一方、他者とのインターアクションを通して、学習者は徐々に授業での学びの実感を始め、従来の受身的な授業方式に疑い始め、日本語学習の仕方、日本語教室の在り方を考え始めた。そこから、中国日本語学習者の授業参加の主体性は固定的なものではなく、むしろ受けてきた教育経験、教師の授業方式によって、可変的なものだと考えられる。

2. 来日した留学生（1名）を事例として、事例研究を行った。今後、引き続き、追跡調査をしていく予定である。なお、現段階の調査結果による、留学生が来日後、日本語授業、専門の授業、ゼミなどでのグループ活動によって、中国国内での授業参加を疑問視し始め、不安を覚えた。だが、参加し学習のコミュニティにおいて、「シェアされたレポートリーへの批判的な模倣」、「コミュニティで成長したい願い」、「授業（コミュニティ）参加ルールの更新」によって、自分なりの参加姿勢が徐々に形成されてきたと考えられる。

将来へのアドバイス：

1. 教師が学習者と接する際の味方の転換。学習者は単なることばを学ぶLearnだけでなく、同時に使い手/使用者でもある。よって、教師は、実際の教室活動を考案する際、彼らが容易に言語活動に参加できる「場づくり」を考える必要がある。例えば、個としての学習者を配慮し、それぞれにとって語れる「内容」のある授業構成をしていく。
2. 授業活動における「学び」の実感を作ること。学習者の主体的な授業参加姿勢が形成されることは、自己肯定感が高まることと繋がっている。よって、教師からだけでなく、学習者同士による自己肯定感の形成を重視する授業デザインが必要だと思われる。

研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

黄均鈞（2017）中国における活動型授業の光と影、言語文化教育学会月例会、2017年5月22日、早稲田大学

胡芸群・田佳月・霍沁宇・黄均鈞（2017）大学院における留学生のアカデミック活動への参加過程の分析—中国の日本語専攻卒業生の学習経験をもとに、日本語実用言語学国際会議予稿集（第10回）、2017年7月8,9日、国立国語研究所

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

黄均鈞（2018b）. 对话型课堂中师生“教”“学”观念的冲突与磨合一基于大三综合日语课的实践研究. 日語學習与研究. 2. pp. 101-109

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

外语课堂的危机与出路（中国大学の外国語教室の危機とこれからの対応），黄均鈞、李羽喆，武汉大学出版社，2018年11月